
Catch the eye 2016年10月

2016/10/3 ソーシャルビジ
(月) ネス

昨日の日曜はまいった。10月なのに、真夏日。西に傾き始めた太陽が熱にうなされて、光は濁ってみえた。熱射は強かった。どうなっているのかと、何度も口をついて出た。街の風景に秋が見えない。

それでも時間は刻々を進む。秋は催しの多い季節。1日はドーンセンターでソーシャルビジネスフォーラムがあった。サポーターとして少し協力した。コンペの最終審査に残ったのは6団体。

阪神あわじ大震災を機にNPOの法制度が生まれた。コミュニティービジネス、ソーシャルビジネスという言葉と概念が社会にのぼり始めたのは1999年前後。この頃の起業家を第一世代と理解している。

それから20年近く。社会の隅々、地域のそこかしこに根を張り始めた。今から10年前、商工会主催の創業塾に、営利と非営利の垣根を意識しない若者が受講していた。

営利なビジネスから社会貢献的な活動につなげる構想。彼はごく自然にビジネスプランを話し、まったく気負っていなかった。“こういう人が出てくる世の中になったんだ…”。少し感慨深かった。

それから10年。今が大事な時だと感じる。問題意識として持っている。オリンピックが始まり、終わる頃から覆いかぶさったいた様々な問題が浮上し始めると予想している。

上がふらついても、少々のことでは浮足立たない人々の協調と協力と協働。身近なところで志や使命感を共有する人々の、課題を先読みした活動、営みが不安定な社会のバランスをとる。自分もその一助に。

2016/10/7 滝畑てれれ
(金)

「映像発信てれれ」の下之坊さんがいよいよライフワークの完成型へ。故郷の河内長野・滝畑に民家を購入して「滝畑てれれチセ」をスタート。その一周年の集いに、松原の創業塾から足を延ばして、2時間ほど参加。一度メールのやりとりをしてこの日初めてお会いしたゲストのアサダワタルさんとも言葉を交わし、お話を聴いて、やはり通じるものを感じたのでした。



2016/10/8 女性の時代
(土)

予報では曇りから雨ということだったが、晴れている。気温が高めで少し暑い。着るものこまるこの時期。今日は寒露。

秋は行事が多い。季節がよく、新年度が動きだして必要な準備期間を設けると、だいたい秋になる。それらのほんの一部ながら、関わる。その中で先日ふと感じたこと。

グループや団体を組織しNPOとしてソーシャル、コミュニティビジネスを展開する既存のタイプと、専門性をそなえた個人やその小さな事業所が事業展開のそのものの中で社会的な課題に寄与するタイプ。

後者のタイプがこれからけっこう増えていくのではないかと、特に女性の起業する小規模企業の間で。知的障がいをもつ若者を雇用する、地域の高齢者の居場所に自店を使う、等々。そんな動きが増えてきた。

社会や地域の課題に目をむけるきっかけは、個々人に何らかの出会いがあつてのこと。合わせて、起業する若い世代、アラフォー世代は、子育て中の経験も少なくない。熟年層は自身の老いとも重ね合わせて。

最近とみに「女性の時代」は“ほんもの”の感。

2016/10/13
(木)

親近感

天気が安定してきた。今日も曇りのち晴れの予報。気温も低くなり、トレンチコートを着ている人もいた。まだそこまではないように思うけど、靴は秋ものに履き替えた。街に秋の風景。

3週間ほど前だったか、地下鉄車内で熱心に本を読んでいる男子を見た。乗り込んでくるなり、抱えていた本をすぐに開き、食い入るように読み続けた。その姿が目をついた。

本は単行本だった。カバーはついていない。何を読んでいるのだろう…。降車側とは反対ドア前に立つ位置から斜め右に彼。紙面は見える。でも、表紙のタイトルが見えそうで見えない。

何度か目をこらす。ようやく「身体」という文字が見えた。そして「数学」…？ あらためて、読んでいる男子を斜め後ろから眺める。年齢は20代半ばから後半、仕事はクリエイティブ系の感じ。

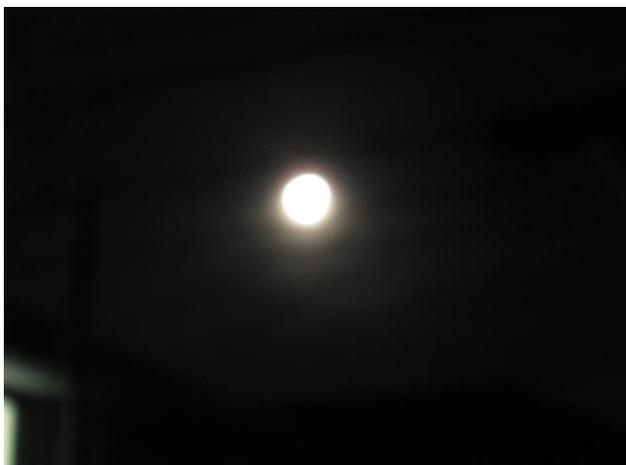
身体と数学がつながる本なら、おもしろそう。『愛は脳を活性化化する』、『ゾウの時間 ネズミの時間』のように、人間の本質的なことや普遍的なものを再認識させてくれそう。

それから一週間ほどのち、新聞の広告でみた『数学する身体』。ああ、彼が読んでいたのはこの本だ、たぶん。そう思ってももなく、10月5日の日経の「旬の人時の人」で紹介された人がその著者だった。

『大学などに属さず「独立研究者」を名乗り、ライブのない日は京都の自宅で研究と思索にふける』とか。先日「日常編集家」にお目にかかった。独自のスタンス、スタイルで仕事し生きる彼らに、勝手に親近感。

2016/10/15 LgL秋の会
(土)

創業塾は熱い思いをもって参加する人たちが多く、塾が終わっても、交流が続くものですが、昨年の相楽はひとときわ。メンバーの一人が開業したアートサロンで、秋の会。アメリカ在住十数年のセンスが知的交流を促し、他のメンバーからこの日初めて公表された話題も出てきて、びっくりするやら、感心するやら。テラスで秋の月を愛でながら、男女差について会話。本当に大人なサロンでした。



2016/10/17 ペンを走らせる
(月)

明け方にかけて雨がつよく降った。予報では夕方まで曇り空ということだったが、晴れてきた。雨上がりで空気が澄んでいるよう。気温も少し高め。秋晴れのすごしやすい週の始まり。

はや10月も後半。9月9日に開講した松原商工会議所の女性創業塾が先週14日に終わった。事業コンセプトをアプトブットするのに生みの苦しみを実感した受講者たち。何事も期限があるので、いったん区切りをつけて、まとめ、最終日はプレゼン。

創業は人生にかかわること、塾の間に講師と受講者がかわすやりとりは深くなる、深掘りすることになる。数人のやりとりを聴くだけで、共感度が高まる、特に女性は。共感し合い、気心を許す場になる。

そういう関係性の変化が最後のプレゼンに表れることがある。。初日の自己紹介では紹介されなかったことが語られ、そういう決心を秘めていたのかと感心することがある。今回の塾もそうだった。

だからその業なのか…。あらためて合点がいく思い。医師の診断も、答は患者の中にあるという。創業など、人生の選択にかかわる支援も、本人の中にあるものを大切して、引き出さなければと再認識

順に発表を聴き、コメントして、全てのプレゼンが終わった時点ですかさず、全員に声がかけた。「プレゼンを終えて、いま感じていること、なんでもいいので、所定の用紙に書きましよう！」。

書く枠は10×15cm四方。5分もあれば、手をとめるだろうと思っていた。でもとまらない。ほとんどが熱心にペンを走らせている。ああ、何か自分の中に目覚めたもの、芽生えたものがあるんだ……。そうみえた。

そういう経験をこれから何度かするに違いない。よいケースばかりでなく、ハードルも多々ありながら、そのたびにまた目覚める、芽生える。大変だけど、未来にご褒美が用意されていますから、どうぞおたのしみに。

016/10/19
(水) 「創造のための
アーカイブ」

スポーツ・文化・フォーラム分科会で、文科省、京都府共催の「創造のためのアーカイブ」に参加。場所は京都文化博物館。旧日本銀行の重厚感ある建物。京都は、そのものが「アーカイブ」。4Kデジタル復元された『雨月物語』が少しだけ上映された。京都文化博物館のもつ「地霊」と、映画のもつ魂が、この場にいる人々を過去の世界に引き寄せた。そんな一瞬を感じた。パネルディスカッションのパネリストの、それぞれの分野からの発言が興味ふかく、分野は異なるけど、示唆に富む話が聴けた。出かけて正解。





2016/10/20
(木)

観察

10月半ばに夏日なんて…。このぶんだと紅葉の見ごろは12月になりそう。そもそもきれいな紅葉が期待できるだろうか。23日は霜降。

昨日の夕刊を今朝地下鉄の中で読んだ。『今、自分が面白い』、俳優「藤原竜也」のインタビュー記事。「モンテ・ニュー」の言葉が生きる。

『ひとりひとりの人間は、もし自分をこまかく観察する能力を持っているならば、自分自身にとって非常によい教育材料となる』。

著名な臨床心理士の診察現場に居合わせた人に聞いた話。患者さんことがすぐにわかるのはなぜですか？と尋ねたら、『それは観察よ』。

「信頼関係」も、観察の目が生きる。『信頼の構造』を先日久しぶりに開き、そういう能力を「社会的知性」と書いてあったことに気づいた。

これまでずっと、こうしていろいろ書いているということは、自分と他への観察の目はそれなりに待ち合わせていると思う。

そういう中で最近とくに感じているのは、何をみて、何を感じるか、その個々人の相当な差。

同じ話を聞いてどの文脈をきりとるかの差の程度ではなくて、背景の読みとりや、感度といったものがの差が相当なのではと。

経験則を最新の技術で測定できたという研究成果がある。この観察度合いの個人差も見える化なれば、おもしろい。いや、逆かしら。

2016/10/24 うつぼ公園
(月)

秋晴れの朝。運動がてらに歩く。



2016/10/27 言葉にできる
(木)

昨日は着る服を失敗した。この時期に夏日、j少々むせた。今日は大陸から冷たい風が下りてくるらしい。まもなく立冬だが、来月からは寒くなるとか。ということは、紅葉に期待がもてる？

9月初めに新聞に載った広告、『言葉にできるは武器になる』。これがよく売れているらしい。武器という言葉はともかく、コンセプトの大事さをしつこいほど話している立場からすると、よい援護になる。

自分が大事だと考えていることをどう表現するか、端的に表すか。芸術的センスのない者には、「理」から入るのがよい助けになる。わかっているつもりの言葉の意味を辞書で調べてみるのがその例。

電車の中や街中の広告などに気の利いた文言を見つけると記録するのも一つ。美術館や博物館のものがいい。『能の雅・エレガンス、狂言の妙・エスプリ』には、ほおーと感心した。

言葉をどう解釈するか、それも大事なこと。自尊心という言葉は辞書で調べれば、「自尊の気持ち。特に、自分の尊厳を意識・主張して、他人の干渉を排除しようとする心理・態度・プライド」とある。

それをこう解釈する文もあった。『真の自尊心は、人に頭を下げ、へりくだり、地位低くとも、生きることに對する自信を傷つけられない。回りに迎合することなく自己の目的や信念は微動だにしない』。

見て、読んで、聞いた言葉を吟味し、消化し、自分なりのものへと昇華させる。そのための<儀式>が、考える時間、書く時間をもつこと。做うままでは<言葉にできる>ことにならない。

そうこうして、記録した言葉も今ではけっこうなボリューム。

2016/10/29
(土)

伊丹

伊丹市は文化に力を入れている。劇団を主宰する知人の公演がアイホールであり、お昼の部に出かけた。その後、招待券をもらい、柿衛文庫、市立美術館へ。

